

## 油彩

絵を観るといふこと

これまで、絵を描くということについていろいろと述べてきましたが、

今回は少し立場を変えて、鑑賞するということについて考えてみたいと思います。

## ■鑑賞について

ヤン・ファン・アイク  
「マルガレータ・ファン・アイクの肖像」1439年  
グルーニング美術館、ブルージュ  
32.6 x 25.8 (cm)



今年はお日本におけるイタリア年というところで、各地で関連の展覧会が開かれています。また、その他にも海外の美術館からたくさん作品が運ばれて、居ながらにして世界中の名画が鑑賞できます。しかも今日、手軽に海外旅行が出来るようになり、

シーズンともなるとルーヴルやウフィッツイ、ロンドンのナショナルギャラリーなど、著名な美術館は日本人でごった返しています。特に、パッケージツアーなどで出かけると、現地のガイドさ

## 二浦明範の静物画講座

みうらあきのり 1905秋田 東京学芸大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館  
油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼現  
代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家海外研修員としてベルギーに滞在(96  
〜97) 春陽会会員

んが待ち構えて、美術館の作品について、いろいろと説明をしてくれま

て次のスポットへ行ってしまう。このようなシーンを目の当たりにすると、鑑賞するということは、何なのだろうという思いに駆られてしまいます。

最近小さな美術館でも日本語で書かれたパンフレットやカタログがあり、それを読みながら絵の前に立っている人がたくさんいますね。

このようなガイドやカタログの解説はたいいの場合、作品が描かれた時代背景であったり、そこに描かれて

る「この違いなのです。例えば、ヨーロッパの古い絵画はそのほとんどが聖書や神話を題材にした作品ですが、私たち日本人にと

りとは、あまり縁のない人がほとんどでしょう。そこで、そのストーリーを読み聞きすることで、なんとなくその絵が判ったような気になってしま

います。しかし、実際にはそこに描かれたストーリーが判っただけで、絵の素晴らしさを感じ取ったわけではありませ

ることが多いのではないのでしょうか。このこと自体は、その絵を理解することの手助けになるわけですから、とても貴重なことです。しかし、多くの観客は、絵を観るよりカタログの文章に一生懸命で、実物はその確認を

しているのか判らない時も、説明を

ています。また、ガイドさんがついているような場合は、駆け足で「目玉作品」を見て、早々にバスに乗っ

てしま



模写制作過程 6



模写制作過程 5



模写制作過程 1



模写制作過程 2



模写完成作品



模写制作過程 3



模写制作過程 4



聞いてなるほどと思うことがありま  
す。これも、理屈がわかっただけで、  
本当に素晴らしいと感じているわけ  
ではないはずで。

絵を鑑賞するということは、実は、  
このようなストーリーを知ること  
でも、理屈を理解することでもなく、  
単純に作品に接して「感じる」こと  
でしかないのです。もちろん、それ  
らを知っていることで、より深い鑑  
賞が出来ることは言うまでもないこ  
とですが、知らなくても素晴らしい  
と感じることだってできるのです。

## ■模写での経験

私は、以前にも書きましたが、ベ  
ルギーのブルージュという街にある  
美術館の作品を模写してきました。  
その時、絵を観るということについ  
て、これまでにない感じ方を経験し  
てきたのです。

初めは「この作品を描くのだ」と  
いう、少し高揚した気分が感情的な  
感動を引き起こします。これは、ち  
ょうど初めての海外旅行で名画に接  
した時、「教科書にあった絵だ！」な  
どと喜んでいたときのような、「観

る」ということは少し次元の異な  
る感動と等しいものです。

しかし、このような感動は長続き  
しません。何度か通ううちに、次第  
に熱が冷めてきます。そして、客観  
的な目で模写のための技術を探り始  
めました。その時点では、鑑賞とい  
うよりは調査に近いものだったのに  
違いありません。

しかし、幾度も幾度もその作品の  
前に立って観ていると、次第に、六  
百年も前の画家が描いた筆を持つ手  
の動きや、息遣いまでが感じられて  
くるような気がしてきたのです。

これは、その絵について「判った」  
というのとは全く異なるもので、絵  
そのものより、むしろ描いている人  
物が見えてくるような感覚なのです。  
大げさに言うと、目の前で画家が絵  
を描いている瞬間に立ち会っている  
ように感じられたのです。

## ■絵との対話

このような経験は、誰でもがする  
こととは思いません。特に私の場合  
は、模写という特殊な状況で、異常  
に長い時間をかけて絵と向き合っ  
ていたために起こった、錯覚のような

ものかもしれません。

しかし、絵を鑑賞するということ  
は、その時間が多かれ少なかれ、絵  
と向き合い、対話することを言うの  
でしょう。その意味では、先の観客  
のように一方的に与えられた知識で  
鑑賞するというのは、サッカーの試  
合を観ずに結果だけを聞くようなも  
のではないのでしょうか。

もちろん、人によって興味のある  
試合もあれば、そうでもない試合も  
あります。結果だけが判ればいい試  
合もあり、応援しながら盛り上がる  
試合もあるわけです。同じように、

どんなに名作といわれている作品で  
も、興味が無ければ絵の前を素通り  
してしまします。否、むしろその場  
合の方が圧倒的に多いことでしょう。

しかし、もしも感覚の琴線に触れ  
る作品に出合ったなら、必ずやその  
絵は話し掛けてきます。そこで立ち  
止まって耳を傾けてみるか、聞き流  
してしまいかによって、鑑賞の仕方  
が変わってくるのではないでしょう  
か。すなわち絵を観るということは、  
実は、画家の発しているメッセージ  
を感じ取ること、そのメッセージに  
同調できた時に感動を覚えるのです。



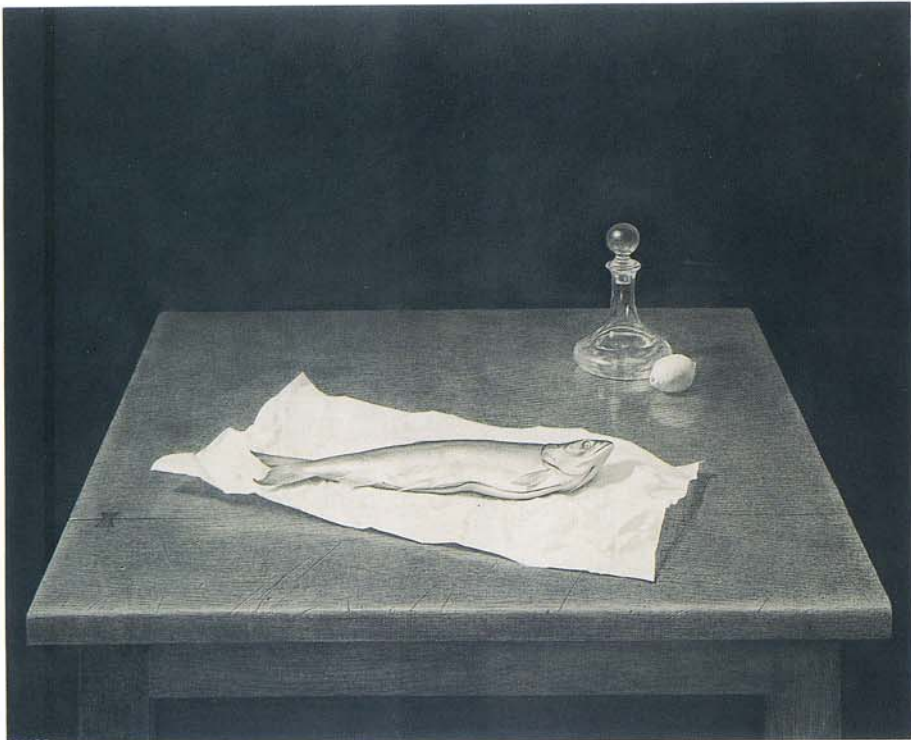
ハンス・メムリンク (1435~1494)  
「若い婦人像」  
聖ヨハネ病院 (メムリンク美術館) ブルージュ 38×26.5 (cm)



模写完成作品



模写過程資料 4分割の右下から左上に制作過程を示している。



「鮭1200」F100号 パネルに膠・カオリン・チタニウム地、シルバー・ポイント、水彩、アクリル他。